

大使コラム（2011年4月）

リスボンは、暖かい日差しに草花の咲き乱れる4月となりました。

しかし、心躍るべきこの季節も、日本の状況を思うと心が苦しくなるのは皆さんも同じだと思います。報道で伝わる悲惨な状況は、つらくて正視できないこともあります。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、ご家族やお知り合いを亡くされ、また甚大な被害を受けてなお苦しみに耐えておられる同胞に、心からお見舞い申し上げます。福島第一原発の問題も一刻も早く処理を進め、震災の復興が容易になるよう祈ります。

ポルトガルでもこの災害には強い関心と同情が寄せられ、たくさんの報道がなされました。大統領や国会議長、外務大臣から一般の方々まで、多くの弔電や弔問をいただきました。ポルトガル議会も日本への連帯決議を採択しました。リスボンの学校で、子供達が日本への励ましの絵画や詩を作って下さるところもありました。在留邦人やポルトガル人による支援活動も広がっています。

また、深刻な事態への日本人の冷静な対応に、有力紙の社説をはじめ、当国でも賞賛の声が多く聞かれます。日本は困難を乗り越え、力強く再生するだろうと云ってくださるポルトガルの人々の声には、勇気づけられます。多くのご厚意に心より感謝しつつ、災害復興に向けて、我々もできるだけの努力をしたいと考えます。

近年の日本では、社会全体が未来への希望を持たず、閉塞感が漂っていたように見えます。しかし、時間はかかるとしても、日本人の英知と努力と忍耐によってこの危機を克服できれば、日本に新たな時代を開くことができるかもしれません。日本人にはその決意があると信じます。

さて、当国の政治経済情勢は、3月下旬、ついにソクラテス首相の辞任表明を見るに至りました。財政再建はEU等外部の直接支援に頼らず、独自の努力で行おうとしたソクラテス首相の社会党政権は、負担増大への国民の不満、債務借り換えに対する国際金融市場の反応（利子率の高騰で、さらに財政負担が増大）予算の採択では消極的協力を行った野党の離反などで、右方針の貫徹ができなくなりました。3月上旬のカバコ・シルバ大統領（社会民主党）の再任演説でも、政府への厳しい姿勢が目立ったのは異例なことでした。

このような政治状況を受けて、大統領は3月末いよいよ議会を解散し、6月5日に選挙が行われることになりました。今後はEUやIMFからの財政支援のほか、より根本的な課題である経済の競争力強化、構造改革に取り組むことができる強力な政権が選挙によって誕生するかが焦点になってきます。

当国経済の動向が今後のユーロ通貨体制や欧州経済、ひいては世界経済にも影響を及ぼすだけに、当国の政治、経済情勢には目が離せない状況が続きます。

遠く離れて祖国の困難を思うとき、心静かに居られないのは私だけではないと思います。時節柄、皆様には、ご自愛のほどをお祈り申し上げます。